

『ソモト・エモーショナル・リコール&リリース』

関連資料（10）

引用・出典

◆もうひとりのあなた

ジョン・E. アプレジャー（著）83～96頁

ていたのである。

この後に及ぶ、体性感情解放法による治療により彼女の生活は一変した。約1カ月で彼女の痛みは最小限にまで軽減した。事故のためにわずかに残された構造的疾患や、感情レベルでの問題は頭蓋仙骨治療で解放されて、全ては回復する方向に進んだ。

これで頭蓋仙骨治療がその他の組織メモリー、エネルギー・システムの検査及び解放、または体性感情解放テクニックと密接な関係を持つことが明確になったと思う。次はイメージ治療や対話療法とその他の治療法との関連である。しかし、これらの治療法も、頭蓋仙骨治療や体性感情解放法などの治療法とのつながりを簡単に理解してもらえると信じている。しかし、その前に“エネルギーの弾道”についての説明と、触れるだけで得られる偉大なる力と強さについて少し説明を加えたい。

XVII. ヒーリングエネルギーについて

これは真実性を保ちながら説明するには、非常に難しい課題である。テクニックを用いるのは簡単だが、信じるのは非常に難しい。私が初めてエネルギーの弾道について知ったのは、20世紀前半に頭蓋骨は可動性を持つと確信したオステオパスのDr.サザーランド(William G. Sutherland)が開発した「V状放散」というテクニックについての説明を聞いた時である。彼は、現代医学に認められるに十分な証明はできなかつたが、頭蓋骨オステオパシーの創始者である。Dr.サザーランドは、何らかの原因で動かなくなった頭蓋骨の縫合関節の診断法と治療テクニックを開発した。彼は頭蓋骨自体に焦点をおいたが、我々が行う頭蓋仙骨治療法は、頭蓋骨を硬膜システムと頭蓋仙骨システムによる水圧システムを整える手段として用いられる。Dr.サザーランドは両手を使い、動かない縫合部(2つの頭蓋骨が合わかる関節部)の反対側の頭蓋骨に片手を沿え、患部に沿えた反対の手に向けて直接エネルギーを送るテクニックを開発した。彼は、何らかの理由で、患者の體液を通り抜けて縫合部に直接送られると直接送られた手からエネルギーを感じ取る方法を見つけ出した。このエネルギーで、動かない縫合部は正常な状態に戻り再び可動し始めるのである。

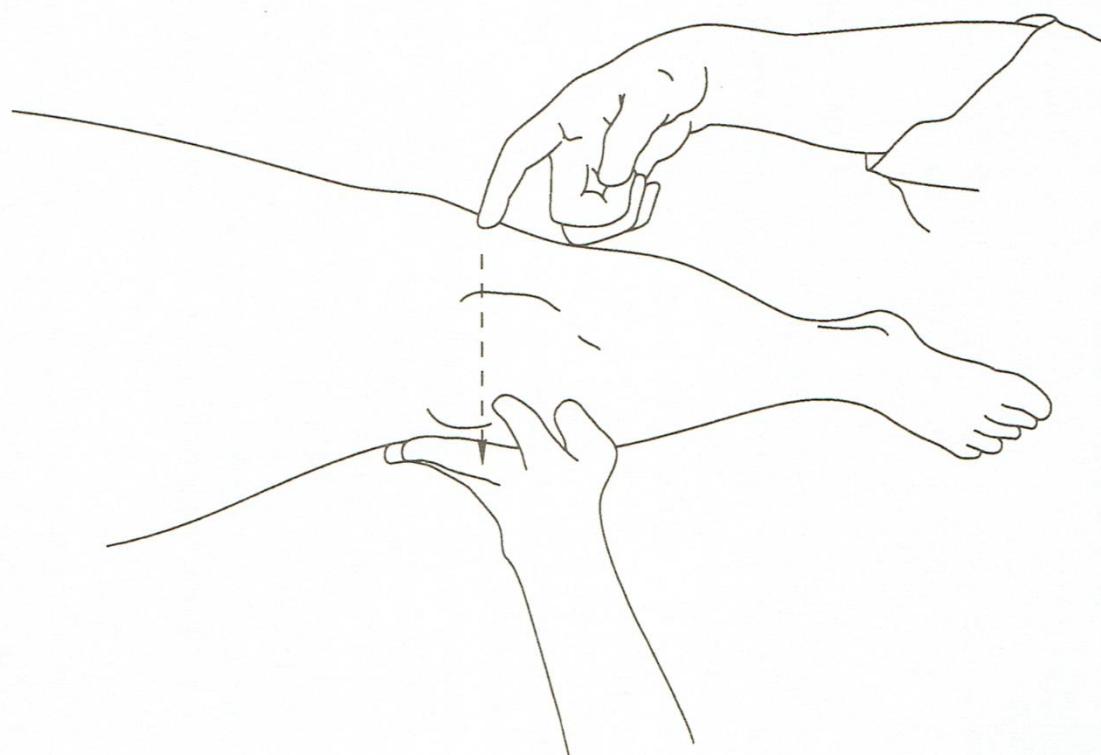
我々は、エネルギーを集中して直接送るには、體液を通さなくとも治癒エネルギーを送ることを見出した。また、このエネルギーの弾道は身体のどの部分にも使え、効果を上げることも判明した。私達はこのテクニックを、子供を持つ母親に教えている。またセミナーでは、両親や恋人同士、また知らない人同士でもお互いに使えることも教えていている。

エネルギーの源が何であるかは、私もわからぬ。何らかの道具の役目を

果たしているのか、身体に流れる電流を計測しているのか、私にはわからない。ただ私が理解しているのは、エネルギーが流れているときに前述した熱が発生し、次第に治療脈が現れて強まり、そして徐々に減少して行くことである。そして、その過程の間は頭蓋仙骨システムが停止することである。何だろうか？ 私にはわからない。しかし、実際にエネルギーは送られ、効果を上げるのである。

最も良い例として紹介するのは、数年前にミシガン州立大学で働いていたころの私自身の体験だと思う。それは夏も終わりかけた、ある土曜日の朝であった。私は庭というよりは雑木林のようないちじゅう園に入り、余分な枝を切り落とす作業をしていた。その時、私が一束の枝を切り落とすと同時に、切り残りの枝がリラックスして開けていた私の左目を閉じるよりも速く打ちつけた。枝が目を打ちつけた後、私は何も見えない状態に陥った。そして数秒後、激しい痛みが左目を襲った。私は何とかして物を見ようと努めたが、見えるのは明かりとぼやけたイメージだけである。すぐに私は、左目が失明すると想像した。おそらく目を失い、義眼が必要になるかも知れないなどの考えが脳裏を素早く次々に横切った。そして、次第にパニック状態に陥る自分を何とか抑えようとした。私は家に戻り、妻のダイアンを呼んで左目の中に何が見えるか尋ねた。彼女によれば、おそらく目を打ちつけた枝の跡だと思われるが、眼孔にくぼみが横切っていると言う。当時、私自身が緊急処置室に勤めていたので、なるべく緊急処置室に行きたくはない。この時点ではまだ、型通りの医療処置を受けたくはなかったのである。多分この時の躊躇は、検査による診断を聞くのが恐ろしかったからに違いない。

私は寝室に行き、ベッドに横たわりながら自分が置かれている事態を整理してみると、妻のダイアンには、しばらくの間1人にして欲しいと頼んだ。事態を理解している彼女は私の頼みを聞き入れ、私を1人にしてくれた。私には寝室の外でただ心配しながら待つ彼女の気持ちがよくわかる。数分間ベッドに横たわった後も左目の痛みや視覚も一向に回復しないと自覚した後、自分自身に呼びかけた。「OK！ アプレジャー、だらしね



図解5：膝へのV状放散テクニック

え野郎だ。お前はエネルギーの弾道について、いつも皆に教えているじゃないか。お前は自分が教えることが信じられないのか？自分が教え伝えている概論を自分で証明してみろよ」。私は実演してきた己の信念を侮辱して恥ずかしかった。傷ついていない右目で時間を確かめると、午前11時22分である。私は右手を自分の頭の後ろに置いた。右手の指がエネルギーを送る側となる。エネルギーを送る指は人差し指、中指、薬指を使うことにして左手で左目を被った。そして私は頭の後ろに置かれた右手の指から、左目を覆っている状態である。そして私は頭の後ろに置かれた右手の指から、左目を覆っている左手に向けてエネルギーを送るように集中し始めた。集中して開始するまでには数分要した。左目を失つたらどのような人生を送るかを考えている気持ちを払いのけ、エネルギーを送る作業だけに集中するまでに余計な時間が要されたのは確かである。眼帯を付けなければいけないのか？ 義眼を入れなければならないのか？ このような考えが頭の中を通り抜けた。それに増して、なんとも痛くて我慢できないのである。

で目を覆っていた掌がはつきりと見えるのに気が付いた。私は感嘆した。「ワオー、本当にこれは効くぞ！」時間は11時30分である。治療に要した時間はわずかに8分間であった。

私は笑顔で居間に出て行った。できるだけクールに落ち着くように努めた。本当は飛び跳ねて喜びたかったのだが、…痛みは消えてはっきりと見えるし、何よりも自分が教えているエネルギーの弾道テクニックが、自分自身にも効いたのが嬉しかった。私はダイアンに、左目を再び見るように言った。彼女は、眼孔のくぼみは見えないと答えた。その後、私の左目には何の異常も現れてはない。私は冷静を保ちながら、エネルギーの弾道テクニックの効果を再確認させてくれた庭の枝に感謝した。私は、枝から加え残されたエネルギー・システムが解放されたのだと信じている。また治療エネルギーはどこかに存在して、何らかの形で治癒力を供給しているのだと確信している。

集中して眼球に気持ちを込めてエネルギーを送り出すと、眼球に脈が打ち始めた。これが、治療脈であることは理解できる。治療脈が増すにつれて、左手の掌に熱が伝わり始めた。私は頭の後ろに置かれた右手が勝手に動きながら位置を変えるがままにした。治療脈は次第に早まり、伝わる熱も増して行くと同時に目の痛みも激しさを徐々に増していく。余りの激痛に、何回も中断しようとも考えたほどである。しかし、私の信念を通すために、また、自分の練習のために中止することはできない。また自分の一部分を切り離して、自分自身の変化をのぞくのも興味深いものである。私の身体は前後に揺り動いたが、最終的にエネルギーの弾道を保つ体勢を得て私自身も安心した。

突然のことである。私の左目から居間からでも聞こえるほどの音で、「ボン！」と大きな音が生じた。振り返って考えてみると、私自身、自分の頭の中からあのような音が発生することは夢にも思っていないかった。しかし、あの時は確実にはつきりと大きな音が鳴ったのである。その後、目の痛みは次第に和らいだ。その場の恐怖感とパニックから落ち着いた後、私は左目

もう少し、エネルギーの弾道テクニックがどのように役立つかを紹介したい。今度は、私以外の人がこのテクニックを用いた実例を紹介して、私が偽りを言っているのではないかことを証明したい。エネルギーの弾道テクニックを取得するには、全く医療関係の知識に携わらなくても構わない。アプレジャーアソシエーションでは、「分かち合う(Share care)」という1日講習会を主催している。参加者は、苦しんでいる人達を少しでも助けたいと考えている人、またはその本人を対象に行われる。「エネルギーの弾道」は、1日講習会の分かち合うで教えるテクニックの1つに含まれている。ある時、私はその1日講習会に参加したアーサーと名乗る人から電話を受けた。彼によると、彼はノースカロライナ州で州知事が州立の建物を利用して、少しでも税金対策の補助をするために行われた会議に参加したと言う。アーサーはマイアミから参加した税金専門の弁護士である。州知事は会議中、肩に及ぶ粘液囊炎(肩関節包内に生じる炎症)が痛んで大変、苦しんでいた。アーサーは少しでも助けになれるかと思い、エネルギーの弾道テクニックを試してみるか州知事に尋ねると、州知事も同意した。アーサーは1日講習会に以前参加してテクニックを修得していた。そして彼が

エネルギーの弾道テクニックを施すと、州知事の肩の痛みは消えてしまつたのである。アーサーは自分の能力を自覚した。しかし州知事は嬉しいが、助けてくれた人が治療家でもない介護士のアーサーであるために戸惑っていたらしい。これを聞いて、人間はお互いが助け合ううために生まれ持つ力を備えていると信じている私達は非常に嬉しかった。アーサーの体験は我々の理論を証明したのである。私達は、あなたが本質的に持つ力を誰かと分かち合つてもらいたいのである。我々はアーサーを助け、アーサー自身は州知事と共に助け合う力を認識したのである。組織化された医療機関は己の誇示と暗示により、我々が持つ本質的な治癒力を遠去けようとしている。

次に紹介するエネルギーの弾道による例は、劇的で、賞賛すべき我々の協会の学生が経験した体験談である。この学生はそのころ、シカゴの病院で補看護士として働いていた。ある日、午後の勤務にきてみると、彼が受け持つ病室の1つにその日の朝に足の切斷手術を受けた年老いた女性がいた。彼女は糖尿病のために、足に壞疽(体内組織の死、または腐敗)が生じたのだ。そして彼女の選択は膝下の足を切斷するか、死を選ぶかであつた。我々の学生が4時の午後の勤務に来た時には、彼女は痛みにもがきながら苦しんでいた。彼女に許されたモルヒネの投与は4時間おきで、6時まで投与することは許されない。最後のモルヒネの投与は午後2時に行われたのである。切斷手術は、昼前に終了した。切断された膝と大腿部にはキヤストが着けられている。この学生は、痛みに苦しみもがく衰れな老人の声を聞き捨てることができなかつた。彼は頭蓋仙骨治療の基本コースで学んだ、詫のわからないエネルギーの弾道テクニックを試す決心をした。彼の報告によれば、彼は切断部分を両手で挟むように支え、エネルギーが手の間を通り過ぎるように想像した。彼は次第に治療脈を感じ、そして熱を感じ始めた。老人の苦しみもがく叫び声は約1分続き、そして次第に鎮まつた。患者はリラックスして眠り始めたようである。彼女は、彼の勤務が終了する夜中まで眠り続けていた。翌日の午後、彼が再び出勤して彼女のカルテを覗いて見ると、彼女は一晩中眠つていたらしい。モルヒネは翌朝の9時

に投与されている。記録によれば、彼女は気分もよく、明るく元氣であると報告されている。彼が翌日の4時過ぎに部屋をのぞくと、彼女は元氣そうであった。その後、彼女はモルヒネを退院するまで一度も要求していない。彼は4時半と11時ごろに、毎日エネルギーの弾道テクニックを彼女に施した。そして老女は手術から10日した後、喜びながら退院した。この回復期間は糖尿病による壞疽のための切除手術を受けた老人にしては、驚くべき日数である。彼は老人に何を施したのかを病院側の誰にも話さず、また本人にも教えなかつた。もし教えていたら、いかに患者が早く回復しても、彼は変人扱いされたであろう。

頭蓋仙骨治療を学ぶ我々全ての人達を始め、分かち合うの1日講習会を受講した人達はエネルギーの弾道テクニックで多くの苦しむ病人を助け、またお互いに助け合つている。あなた自身が試すまでは、このテクニックを無視して投げ捨てではない。このテクニックによる副作用は何もない。テクニックで得られるものは、あなたが人を助け、苦しむ人達を治療でき、最高な気分が経験できることである。違う前に1度試してみたらどうだろうか。

数年前、私がエネルギーの弾道テクニックについて、カンサス州のトペカにある脳膜炎協会で講演を行つた。参加者は、このテクニックは一種の催眠術であると提言した。彼らは私に、新生児と動物に試みるようになると要求した。実演は成功であった。これで催眠術ではないことが証明された。さて、次に触れるだけで得られる偉大な力について紹介したい。